

新刊

□浦和市教育委員会(編): 田島ヶ原サクラソウ自生地 天然記念物指定70周年記念論文集 A4版 130pp. 1990. 非売品.

やや以前の出版だけれども、今後同様な調査がされる際に問題が繰り返されると思われるのでここに紹介しておく。表題のとうりサクラソウ自生地をどうしたら保護してゆけるかを色々な角度から5年かけて調査したものの纏めである。それはそれでよいのだけれど、サクラソウのことだけにとらわれていて、この群落に随伴する希少植物には全く目を向けていないのが目立つ。サクラソウのあるこの群落は関東地方の低地の湿地群落として特異なもので、まずこの群落の性格を明らかにすることが基本であろう。構成種の一部の日本での分布を調べれば、希少種を包含する特殊な群落であることはすぐ解るはずである。ヒノキカサ、ノウルシ、シムラニンジン、エキサイゼリ、ハナムグラ、サワトラノオ、バアソブなどかなりのものを挙げるができる。これらのものは多くは個体数が少なく、優先種を比較する植生方式の調査では掛かってこないの、群落の特異性も消えてしまう。この本にある10年間の変化を示した植物目録をみると、上記のもの多くが消滅してしまっているらしい。シムラニンジンがここで見られないなら、種類として絶滅してしまった可能性もある。きめ細かな群落調査をしておけば、その変化は掴みうるものであろう。そのような記録をこの本にも残しておいてもらいたかった。排水による乾燥化が原因らしい。それによって群落の構造に変化が起こっているらしいが、その点は正確に押さえられていない。今からではやや手遅れだけれど、細かな群落組成表でも作っておけると将来役に立つと思う。サクラソウは今の所大丈夫だということで、希少植物の消滅にはあまり気にしていないようだが、この地域の保護はサクラソウよりこの方が余程大切なのである。出来る限り排水を規制して湿地を回復することが急務である。

本の内容がこのようなになった原因のひとつは、保護地がサクラソウ自生地となっていることにあ

る。指定した大正時代にはまだ詳しい群落や希少植物の概念が無かったので仕方が無いが、現在では関東地方の低湿地群落とでも名付けて保護すべき貴重な群落である。関係している役所の人が知らないのは仕方が無いが、少なくとも研究者はこの点を承知した上で研究し、一般の人にその重要性を知らす義務がある。関東地方ではこのような群落は開発で急速に失なわれ、現在殆ど残っていない状態である。恐らく日本全国が似たような状態であろう。可能な場所ならばできるだけ多くの保護地域を作っておきたいものである。

(山崎 敬)

□GPS 全日本ロードマップ A4版 353pp. 1991. 徳間書店. ¥6,500+¥195(消費税・送料)

産地の記録には文字による地名が用いられてきたが、最近はいろいろなメッシュコードを付記することが流行している。メッシュコードは分布図の作成やデータベースの構築には便利であるが、どのメッシュ系を用いたかが他人にはわからないことが多いので、混乱しかねない。地球上の位置の記録には経緯度を用いるのが一番無難なように思う。とはいっても地図から経緯度を読み取るには、補助線を引いたり目盛りを切ったりせねばならず、楽ではないし読み損ないも多い。本書は20万分の1のロードマップであるが、5分ごとの経緯線が記入されており、付属の方眼を用いれば10秒刻みで位置を読むことができる。経度の幅は北と南では異なるため、緯度に応じて6通りの方眼が用意されている。近頃は採集や調査に自動車を使う人が多いし、そうでなくても一冊あれば国内のどこでも経緯度をすぐに調べられて便利である。この地図はロードマップとしては、縮尺がちょっと小さくて使いにくいと思うが、こういう地図を利用して、産地の経緯度記録が普及することを期待する。とくに、調査用メッシュと記録用メッシュが混同されている現状では、記録用としての経緯度を理解するのに役立つだろう。ただし綴じ代がとってないので、綴じ目の部分は役に立たない。どの頁も平に開けるような製本にしてもらいたい。県別のシート物もほしい。ついでにロードマップへの注文を記すと、国道ばかりでなく地方道の番

号があるとよい。高圧送電線はよい目標となるので、これも記入されているとよい。この地図は本来は人工衛星を利用して現在位置を知る、Global Positioning System (GPS) の受信機である PYYIS (ソニー社) の販促用斡旋品であるが、別売もするとのことである。希望者は徳間書店ではなく、(株)ホウ・コーポレーション (渋谷区本町 1-4-3 エバークレース本町 1-C 電話 03-5388-7601) に問い合わせられたい。なお GPS によるナビゲーションシステムは、陸上海上を問わず既に実用化され、車内の画面に地図を表示して現在位置を示すことができるばかりでなく、これから行く先の案内までできるそうである。ポータブル受信機は14~15万円とまだ少々高価だが、弁当箱(女性用)程度に小型化されており、操作はごく簡単なもので、野外調査に使ってももて余すことはない。とくに海外調査では威力を発揮するだろう。位置決めはきわめて正確で、秒以下(距離にして30~100m)の精度を持っている。ただし衛星三個を捕捉する必要があるため、谷間や林下では役に立たないことがある。(金井 弘夫)

□大場秀章：誰がために花は咲く 220 pp. 1991. 光文社カッパサイエンス. ¥790.

講義をかみ砕いた短編集というところ。生物の発生から高等植物の適応戦略まで、堅苦しい理屈を著者の文才で適当にとぼしたりほぐしたりしながら物語る。トピックスは21あるが「カサノリの異常ながんばり」、「わが道をゆくコケ」、「ユキノシタのちゃっかり保険」、「手ごわいイチゴ」などという見出しをみれば、雰囲気は察せられるだろう。近頃の大学生は分子レベルの生物学は習ってくるけれど、形態や分類については高校や中学でも何も仕込んでくれないので、こういう本を読んでもらうことは有益と思う。学術用語がたくさん入っているので、一般向けにはかなり基礎知識がないと読みづらいのではないかとちょっと思い切っ

さしくして、中高生向けの物語りに翻案したならば、身近な植物で実習できる話しもあるので、学校の副読本として使われたり、生徒を分類や形態へ関心をもたせるさそい水になるのではないかと思う。なお「イチゴは多花果」と書かれているが、この和文用語は文字面からでは誤解をまねきやすく、「集合果」の方が無難と思う。岩波生物学辞典(1960)では「2個以上の花から由来した果実の集合体があたかも1個の果実のように見える器官の総称」とあり、例としてモクレン、イチジク、クワ、キイチゴがあげられ、図としてはイチゴが描かれている。このうちモクレン、キイチゴ、イチゴは1個の花に由来するものだから、文頭の定義からすると誤りとなる。同書ではこの用語の原語として syncarp, polyanthocarpium, multiple fruit が挙げられており、「2個以上の花から由来した」というくだりがこの三つのどれにもあてはまるのか疑問である。したがって「多花果」という用語を、この三原語にあてはめてよいものか、再考を要する。最新植物用語辞典(広川書店1965年)では多花果→集合果で、multiple fruit に当てられているが、説明は「穂状花序の密集した各花の子房が成熟して、全体があたかも一個の果実のようにみえるもの。例クワ」とあり、「穂状花序の」というところが引っかかる。学術用語集植物学編(増訂版)では多花果は polyanthocarp に当てられているが、説明はないので追求のしようがない。学術用語集の目的は、一つの原語に対して一つの和文用語を選定することが最大の目的だが、これは原語の方の定義が厳密に決まっていることを前提としなければ成り立たない。原語の方にもいろいろな解釈があるのに、そんなに単純に割り切れるものか、前々から疑問に思っていた。明治時代の欧語崇拜の思想の尻尾が、いまだに尾を引いている感じがする。

(金井 弘夫)